

なかよくする子ども

みんなちがってみんないい



○君とS君は年長で同じクラスになって以来、たいてい行動を共にしています。集団での活動が苦手という共通点はあるものの、二人の性格はあまり似ていません。むしろ反対です。喧嘩もします。その多くは、子どもっぽい○君のわがままにS君がつきあいきれなくなって始まるもので、手が出ることもあります。「ごめんさい」も言えたり言えなかつたり。それでも、10分もすればまた、回廊に敷いた人工芝の上か、図書室の書棚の陰あたりから、二人の立てる物音やし声が聞こえます。ヒーローになりきったり、ブロックを作ったり、絵本を眺めたりしています。二人で同じことをしているようにも、全く別のことをしているようにも見えます。かみ合っているような、いないような会話は、「あれ」とか「これ」の指示語が多く、聞いていてもよくわかりません。とにかく、二人でいることが大切なのでしょう。どちらかがふいに走り出せば、そのあとをもう一人が追いかけていきます。かれらのこころの波長が振れ合っているとき、「言葉はいらぬんですよ」と、見守る保育者は言います。

「なかよし」の距離を、わたしたちはしばしば見誤ります。手をつないで笑っていれば「なかよし」と思い、喧嘩が多くていがみ合っていれば「なかよしではない」と思う。そのどちらも、本人たちにしてみれば見当外れもいところなかもしれません。人と人との居心地の良い距離は人それぞれみな違っているのに、そしてそれぞれにいろいろあるはずなのに、別の価値観の物差しを無理に当てはめて、なんとなく関係を理解したような気になってしまふのです。

ある日の午後のサークルタイムで、わたしはT組に問いかけてみることにしました。T組は○君とS君のクラスです。どちらかというとルールに縛られたくない自由人が多く、いつものびびと明るく過ごしています。

「なかよしって、どういうことなのかな」

そう尋ねると、何人かの手がさっと上がりました。堂々と立ち上がったN君が言います。

「あのね、じぶんがやさしくして、あいでもやさしくするっていうことだよ」

園の中で、家庭や社会のあらゆる場面で、子どもたちは「なかよくする」よう啓蒙されます。けれど、大人に言われるまでもなく、かれらは遊びや活動を通して、自然に打ち解けていきます。多少のいざこざや例外はあっても、互いを受け入れ、許容しあう子どもたちのこころの柔らかさに、わたしたちはかないません。だれかが傷ついているとき、何も言わなければ寄り添っている。だれかがやりすぎているとき、そっと制してくれる。意見が違っても、思いが違っても、ともにいる。言葉のいらぬやさしい「なかよし」を、子どもたちは体現しています。

「世界中が『なかよし』って、難しいのかな」と尋ねたわたしに、I君は早口で言いました。「あみださまにやり方教えてもらえばいいんじゃない？」阿弥陀さまは今日もじつと、この子らのそばにおられます。この地球をまもるやさしい方法は、言葉になるより先にぬくもりとなって、かれらの胸に灯っているようです。

まことの保育の願い